

## 第8回「オリアム随筆賞」

### 【優秀賞】

#### 終活異変

徳地昭治・京都府

「終活だ！」と、自分に気合を入れて身の廻りの品を選び分けていた時のこと。ずっしり重い、風呂敷包みの裂の塊きれが出てきた。なにだろと解いてみると、それは母が遺した帯だった。明治生まれの母はきもので過ごしていたから、多くの形見のきものが残った。目ぼしいものは二人の妹が引き取り、後は廃棄処分。それでも「これは母さんが大事にしていたものだからお兄ちゃんが持っていてよ」と押し付けられ、今日まで仕舞い込んでいたのがこの帯だった。形見の品といっても、選り分け作業も終わりに近づいていて、すつきりしたいという気持ちが強かった。しかし、捨ててしまうのは気が咎める。どうしたものか——。思案の末にある方法を思いついた。

「最近、嵌まっているの」と娘が言っていたネットオークションへの出品だった。換金期待ではなく、少なくとも価値を認める方に持ってもらえれば、この帯を愛した母の気持ちバトンタッチされるのではないかと。

その夜、娘の帰宅を待ち受けて、ネット掲載の作業一切を頼んだ。娘は「いいよ、任しといて」と気安く引き受けたうえで「値段はいくらにする？ ネットで売れるのは一万円までよ」とアドバイスしてくれた。私は、娘の忠告を無視して「じゃあ、三万円にしてくれ」と娘に言い渡した。相場の三倍の価格設定は売ることより、母が大事にしていた帯を本気で求める人を探すことなのだから、と胸の内つぶやいていた。

翌日にはネットにアップされた。すると驚いたことに、すぐに注文が入った。注文者は、代金はネット会社を通じて払い込むが、品物は「少し聞きたいこともあるので、直接、伺って受け取りたい」とのこと。了承メールを返すと三日後には、その人が訪ねて来た。

玄関口で交わした名刺には「織物司・井関澄生」とあり、その横に記された住所を見て驚いた。K市N地区——。そこは、私が中学に上がるまでの十三年間、母と私たち子供三人が暮らしていたところだったからだ。

全国有数の高級織物で知られるこの地区は、一步足を踏み入れるとあちこちから機音が洩れてくる。ここで母は賃機の「織り娘」となって、私たちを育ててくれた。この地区に井関さんは在住するという。「同じ空気を吸って育ったのだ」と思うと、たちまち親近感が湧き、名刺にある「織物司」についても聞いてみた。「仰々しい肩書で恐縮ですが、N地区の事情に詳しい貴方なら「直し屋」と言えば解ってもらえるはず」と井関さん。

この地区の織物業は、ジャカードを載せた手機や織機で、金銀糸などの意匠糸を通しながら複雑で豪華な紋織物を織りあげる。複雑な工程は織機などに負担がかかって、しばしば故障した。故障の都度、機械メーカーに連絡していたのでは仕事にならないから、工場は専属の「機械直し」職人を置き、賃機の故障にも対応していた。故障の勘所を見抜いて機械類を素早く直してくれる「上腕<sup>うで</sup>」の直し屋は当然、重宝された。中に独立する直し屋も現れたが、井関さんもその一人だった。

直し屋としての井関さんの腕は、母の帯をネットで見た瞬間に「私が直した織機で織られたものに違いない」と見抜いたことに繋がる。「この帯には『織り癖』の痕跡が残っていました」と言い、「織り癖は手機の癖。杼<sup>ひ</sup>を送る手とペダルを踏む足の力加減に少しの歪みがあつて、模様疎と密の部分が出るのです。直し屋は、その人に合わせて機のを調整しますが、私が直す以前にこの機を動かしていた人は、織り癖を承知の上で、それを個性として見事な帯に仕上げていたのです」

後年、井関さんはそれらの帯を見ている。疎の部分に金銀糸や螺鈿の加工糸の刺繍が走り、別のものではワンポイントに手描きが加わって、上品な散らし模様になっていた。その巧みさ、センスの良さ――。井関さんはすっかり感服したという。「機械を正確に動かさえすれば、よい帯が織れると考えてきた直し屋の浅慮を指摘された気がしたのです」――。一台の機とその機で織られた帯は、時を跨いで母と井関さんを見えない糸で繋いでいた。そして、井関さんは改めて織り手の創意の深さを汲みとっていた。織物に込めた技術や感性、美意識。さらに、それらすべてをため込む織物の地、N地区の奥深さ――。

井関さんの話しを聞いた私は「そんな経緯を聞いては、この帯を手放せなくなりました。勝手なお願いです、買い戻させてくれませんか」と、無理を承知で井関さんに問うていた。井関さんは「いや、いや」と、私の申し出を軽く退けるのだった。

ネットで落札した帯を大事に抱えて去る井関さんの後ろ姿を、私はなんとも複雑な気持ちで見送った。「これで、母の気持ちは帯の価値がわかる人に繋がったのだ」――と、無理に気持ちを落ち着かせながら。